

## 【キーワード】

〔施設種別〕 高齢者施設 障がい者施設 子ども施設 住宅  
 〔運営主体〕 市区町村 法人 NPO 個人 〔補助金〕 内閣府 国土交通省 厚生労働省  
 〔建物形式〕 1棟単体型 複数棟集合型 団地型 〔建物状況〕 新築 増築 改修 一部改修 既存  
 〔対象者〕 高齢者 障がい者 子ども ファミリー 多世代



写真1. 外観

日本赤十字社三重支部山田病院として開設されて以来、三重県中南勢地域における基幹病院としての役割を果たすため診療体制・高度医療機器等の整備の充実を図り、地域住民に対し必要な医療を提供している。赤十字精神に基づく運営方針により、公的医療機関としての使命を遂行し、中南勢地域の基幹病院としての役割を果たすことを目指している。

## ■施設情報

所在地：三重県伊勢市船江一丁目 471 番 2

運営主体：日本赤十字社

設計：日本設計

施設種別：病院

診療科目：血液内科，感染症内科，肝臓内科，糖尿病・代謝内科，呼吸器内科，消化器内科，循環器内科，腎臓内科，脳神経内科，精神科，小児科，外科，乳腺外科，整形外科，リハビリテーション科，脳神経外科，呼吸器外科，心臓血管外科，産婦人科，泌尿器科，皮膚科，眼科，頭頸部・耳鼻咽喉科，放射線診断科，放射線治療科，麻酔科，腫瘍内科，歯科口腔外科，緩和ケア内科，形成外科，病理診断科，総合内科，脳血管内治療科，リウマチ・膠原病科，新生児科

敷地面積：51,979.54㎡

建築面積：16,798㎡

延床面積：56,587.78㎡

構造・階数：RC造 地上5階 塔屋2階（34.63 m）

病床数：655床（一般651床、感染症病床4床）

平均在院日数：12.3日

運営開始：平成24年1月1日

見学日：2015年4月16日，2017年9月15日

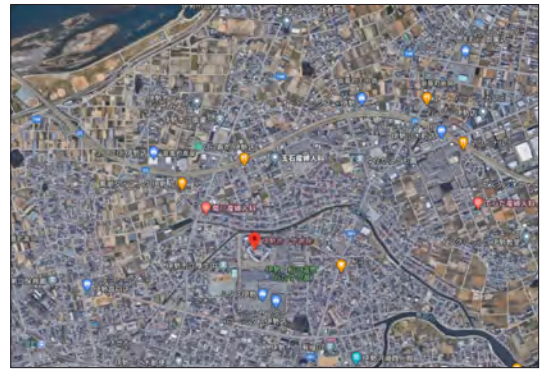


図1. 周辺状況 (googlemapより)

電車およびバスの使用により、近鉄伊勢市駅下車後、徒歩15分を要する。また伊勢市駅裏口(北口)からシャトルバスが運行している。いわゆる病院門前町が形成されており、ショッピングセンターが隣接する。



写真2. 1階部エントランス (ウェイファインディングデザイン)

上階にゆくエレベータは赤・青の2本で、ロビーからその存在がわかりやすい位置に配置されている。



写真 2.1 階部エントランス

入り口正面に総合受付があり、数字がわかりやすく示されている。写真左奥に「青いエレベーター」が見える。右奥には赤いエレベーターがある。



写真 2.1 階部エントランス (ウェイファインディングデザイン)

上階にゆくエレベータは赤・青の2本で、ロビーからその存在がわかりやすい位置に配置されている。

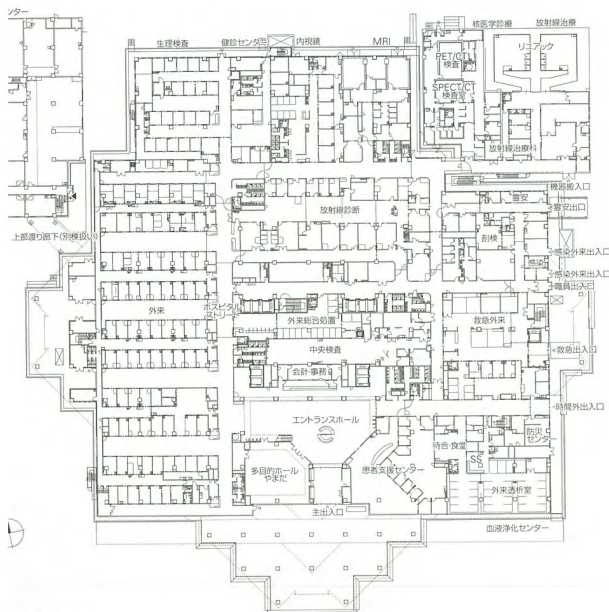


図 縮尺1/1,200

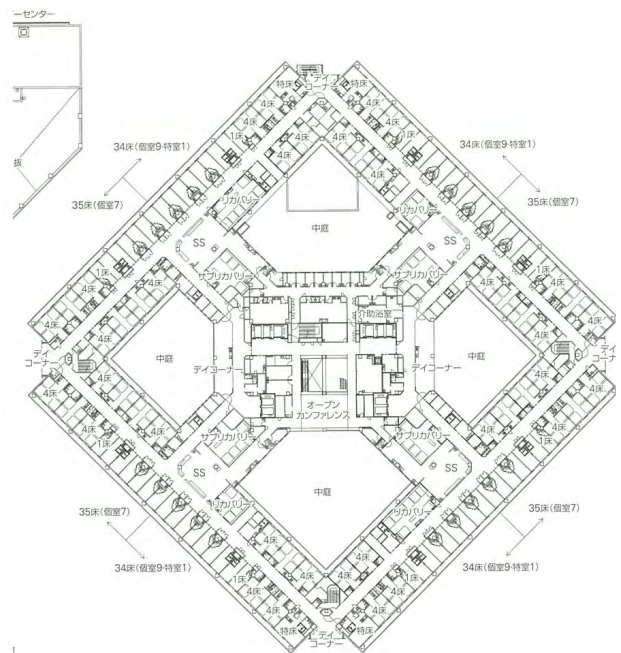


図 2. 一階平面図および病棟平面図 (月刊近代建築 2012 年 11 月号より引用)

## ■沿革、運営概要

三重県伊勢市の土地で 100 年以上にわたり地域医療を支えてきたこの施設は、増改築を繰り返しその時代の要求に応じてきたが、近年の医療情勢と社会の変革に対応できず、移転新築のはこびとなった。敷地は周辺に住宅地のひろがる市街地である。その地域環境にどう対応させた病院を計画するか、検討を行っていた。「スタッフに優しい病院」を実現するために、患者エリアとスタッフエリアの明確な分離を図り、患者さんの目の届かないスタッフのリラックス環境を整えている。吹き抜けでつながったオープンカンファレンスは特徴的で、ここに病棟事務が配置されていることで事務動線が効率的に運用されている。この 1 フロア 4 つの病棟の中心に設けられたオープンカンファレンスは、スタッフ間のコミュニケーションを生み、チーム医療を促進させている。

## ■施設概要

「伊勢神宮より高い建物は建てない。」という地域性に配慮し、低層の 5 階建てとしている。一般的に病院建築では、病棟ワンフロアに対し 2 看護単位、90 床前後の病

床を納め、それを積層するのが機能的に最も効率的とされている。しかしその方法によると新病院は8階建て、35mを超える高層建築となってしまう、とても地域環境にふさわしいとは言い難い。この課題の解決法はワンフロアに8看護単位、約280床を納めた5階建てにするものであった。低層建築とするために600床を超える数の病床を納めた3層の病棟は1辺約100mの正方形の平面であり、これを45度ふることによって、周辺の住宅に対する圧迫感の軽減を図っている。そのほかに病室と中央に配置されたスタッフゾーンへの採光を確保するために4つのコート进行している。

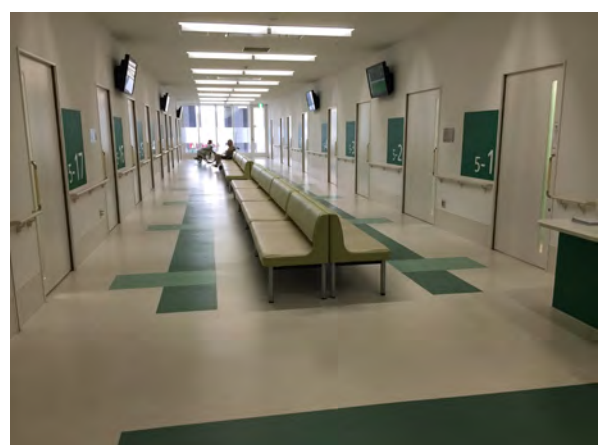
1階には診療関係をすべてまとめ、患者の案内のしやすさと移動の容易さとして上下階に带状の統一した色・サインが施されているなどのウェイファインディングデザインが起用されている。また、外来診療部門では診察室群に緑、検査室群はオレンジを配色して患者にとって構成がわかりやすくなるよう色彩設計を施している。患者は「緑の4番のカウンターに行ってください」などの



写真. コートホスピタルとしての中庭



写真. 診療部門のスタッフエリア



#### 外来診療部門のカラーリング

床から天井までつながるサインのカラーリングで、目を引きやすくなるよう工夫している。家具の色彩も合わせて選択されている。



写真. オープンカンファレンスの階段動線

指示で動くことができる。

2階には手術やICU、救急病棟といった急性期医療の中枢と厨房やSPDなどの供給部門を配置している。そして3階と4階に病棟、5階には病棟と管理部門を配置する構成としている。

## ■チーム医療を実現する環境

この病院が急性期の安定的な対応、専門性を有する病院として選ばれるという地域の役割を果たし続けるためには医療の質、チーム医療のあり方が重要になる。病院では、様々な職種のメディカルスタッフが働いており、医療の複雑化、多様化などを背景に、多職種間のより有機的な連携・協働が求められている。協働メンバー同士の「つながりの質」を高めることによって相乗効果が引き出される。大きな病院組織に所属すると所属部門以外の職種の役割や立場を互いに知る機会が少なく、局所最適に陥りやすい。多くの職種で構成されて成り立つ巨大マトリクス組織において、各職種が個々や組織のニーズ

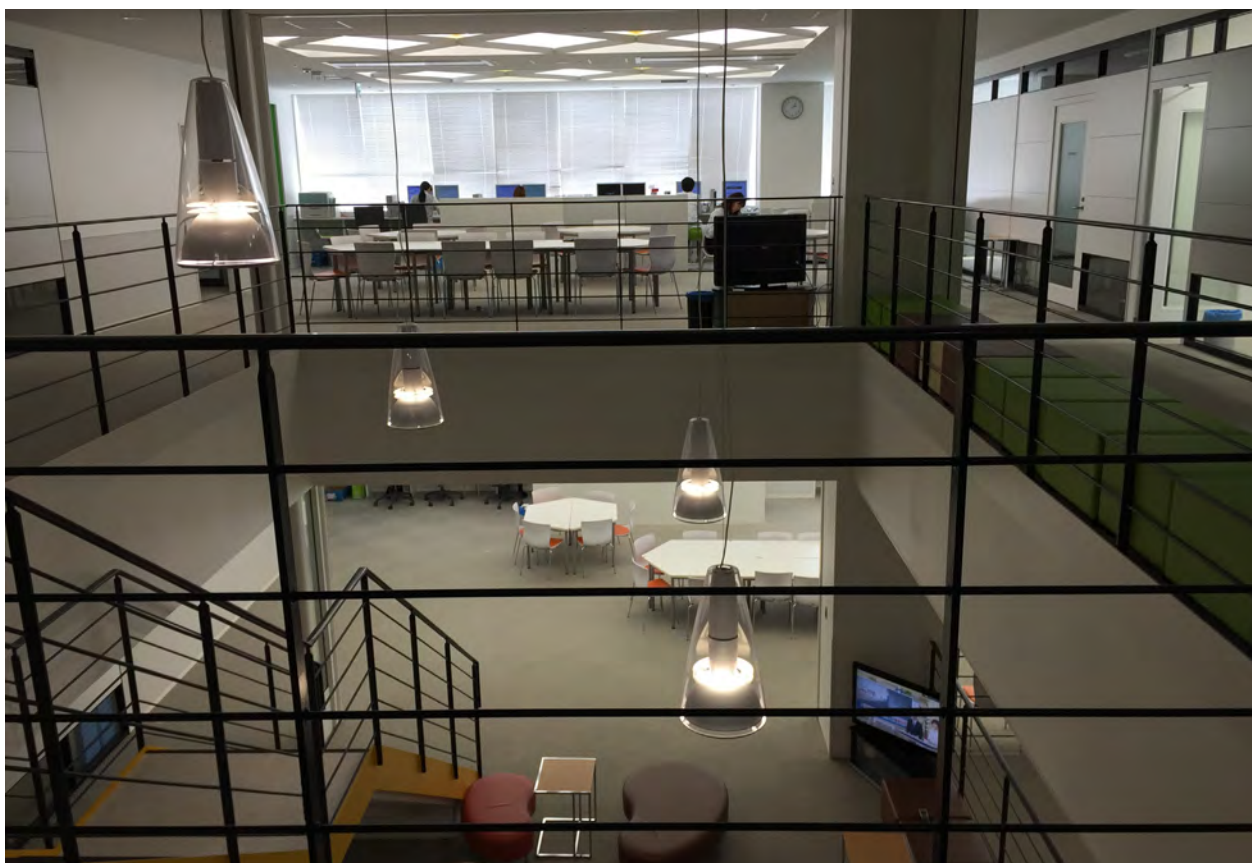


写真. オープンカンファレンス

に添ったチーム医療を構築し展開していくためには、協働を促進するために考慮された職場環境が果たすべき役割は大きい。この病院ではオープンカンファレンスやスタッフ・患者動線の確保を行っている。

オープンカンファレンスは3～5階のスタッフエリア中心部にある。時間・使用用途を限定しない自由な空間として利用され、患者や面会者の動線と交差することがなく、バックヤードになっている。イスと机を自由にアレンジし、いつでも誰でも気兼ねなく使用できるため、ミニカンファレンス研修、個別ミーティングなど様々な用途で活用できる。また特に広いカンファレンスエリアの周囲には、診療機能を支援するセクションとして、サテライトファーマシーや医事課スタッフ、MSW等の拠点を各階に配置している。

サテライトのスタッフは1フロア8看護単位を担当しており、担当の病棟ステーションへ数歩でアクセスできることから、病棟業務の支援を効率的・効果的に行うことができる。また各部署をラウンドする医療チームや看護管理者らにとっても、オープンカンファレンスを起点として同フロア内の各署に水平方向に行き来できる動線となっている。縦方向への移動は、中央階段とオープンカンファレンスにある階段、エレベータ（6基）を利用できる。オープンカンファレンスのフラットでオープンな構造は、必然的に職員間・多職種間の動線の交差を生み出す。顔の見える関係づくりの起点ともなり得る。各チーム医療の活動も見える化されることにつながり、またそれが病院組織全体の活性化にも影響すると考えられる。女性が多い職場であることから、「女性だけの悩み相談室」が設けられているなど、スタッフにとっての職場環境の質にこだわりがある。看護師の人手不足や離職率なども問題となる中で、職員の働く場としての環境整備に力を入れたこの病院の挑戦は注目される。

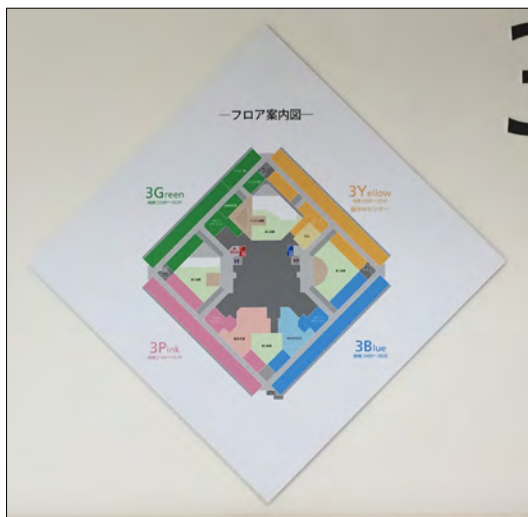
## ■患者のための環境

サイン計画では患者と見舞客にとっての分かりやすさが色彩計画を主として考えられ、直感的な理解を助けている。病棟も、例えば方角ではなく（病院内では方角はほとんど意識されないし、理解できる人は少ない）色を

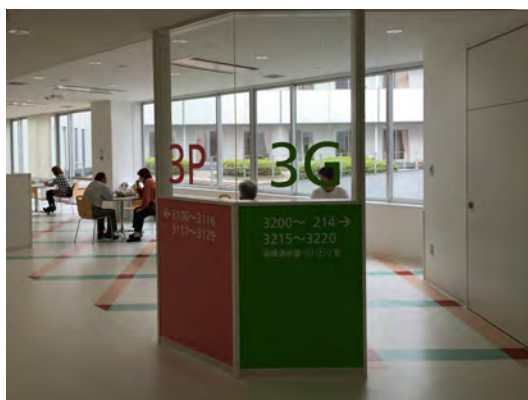


写真・病棟スタッフステーション

病棟スタッフステーションは上部がオープンなカウンターである。病棟は4つの色彩（青、黄色、緑、ピンク）で塗り分けられており、病棟名称にも色彩が用いられている。視認性が高く、わかりやすい。



写真・患者用の病棟案内板



写真・病棟へのサイン

エレベーターを降りるとデイルームがあり、T字の構成で右と左いずれかの病棟にすすむことができるようサイン計画がなされている。このデイルームは緑（G）とピンク（P）の間にあるので、床は緑とピンクのラインでチェック柄になっている。

## 参考文献

- 1) 伊勢赤十字病院 HP (<http://www.ise.jrc.or.jp/>)  
2020年6月12日参照
- 2) JIHa 医療福祉建築 2017年7月号 196号 伊勢赤十字病院  
2020年6月12日参照
- 3) 月刊近代建築 2012年11月号 伊勢赤十字病院  
2020年6月 10日参照

基調に名前を付けてサインと対応させている。また、日常的な医療利用の場ではないという病院のコンセプトに合致しつつ、患者の快適な療養環境づくりが両立されていることもポイントである。患者図書館や相談室等を一体的に整備した患者支援センターでは地域の拠点病院として地域医療との連携を図る姿勢が空間化されている。



### 患者支援センター

入退院管理室、総合相談室、がん相談支援センター、地域医療連携室、在宅療養支援施設、訪問看護ステーション、がんサロン、患者図書コーナーが一体的に整備されている。地域医療との連携を重視し、機能集約されている。



### 化学療法室

近年のニーズの増加に対応して、大規模な化学療法室を整備した。滞在時間が長いので快適な時間が過ごせるようテレビ等も設けられている。

大規模に設けられた化学療法室では滞在が長時間に及ぶ患者のアメニティへの配慮がなされている。ICU や HCU では、自然採光や見舞いのしやすさといった長期予後改善への配慮もなされている。

(作成 東京電機大学 榎村賢 2020

加筆・校正 東京電機大学 山田あすか 2020.1120)



見舞い廊下 (左) と個室の HCU (右)

看護廊下と、見舞い廊下に挟まれた個室の ICU 病室。HCU 病室には直接採光ができる窓を設け、療養環境としての質を高めている。



手術ホール

多くの手術のマネジメントが安全かつ効率的にできるよう、手術室の番号の見やすさセッティングを行える手術室前の準備空間、機材改修廊下等が設計されている。